

復活節第4主日

ヨハネ 10・11-18

2021. 4. 25

カトリック高円寺教会 9:30 ミサ
京都司教区司祭 国本静三神父

良いお天気で、まことに爽やかでありますけれども、わたしたちは今大変な一つの体験をしています。

その前に、今日のヨハネの福音であります、日本人は羊飼いと云うものを日本にいてはほとんど見ることはできませんけれども、たとえばローマあたりにいますと、30分もバスで行きますとすぐに田舎に来て、そこをぷらぷらしてますと羊飼いに会うこともできます。道を横断する群れを見ることもできます。わたしたちにはちょっと分かりにくいと云えかもしれませんが、それは少し皆さんの知識として、またヨーロッパを旅行することがあれば、すぐに体験はできます。そして、ミレーの名画の中でも女性の羊飼いの美しい絵もありますけれども、女性の羊飼いいらっしゃいます。

ヨハネの福音は大変不思議でありまして、ヨハネの福音自体がわたしたちにとってはある意味非常に愛に満ちた、また、ある意味で非常に難しい面もあります。一言で言えば、これのパスワード、これを分かる鍵は、特にヨハネの福音に関しては、信仰を持たなければ全く何のことか分からないような描き方をされています。その中身も、神をとらえる一つのコンセプト、概念、「三位一体の神である」ということです。ある意味でわたしたちはこれをうまく説明することはできない。そして、神学者たち、哲学者たちも「三位一体論」という多くの文章を残しておりますけれども、それを読んでも、それに到達することはなかなかできるものではない。読む者にとっても、神に対する大きな深い信仰がなければ、もうどうにもならない。だから、一つのパスワードは「信仰」です。100パーセント、いや200パーセントと言ってもいいかもしれませんが、その次元を心に持っていなければ、全く理解することができないと言ってもいいかもしれません。

そして、今日の福音の中で最後に言ってらっしゃるんですが、このたとえを言っているイエスは、今度は自分の本心に返っておりますけれども、「だれもわたしから命を奪い取ることはできない」と。これは、三位一体の御子がおっしゃっているわけです。でもわたしは自分でそれを捨てますよ、と。これは十字架につけられることを示されているわけです。「わたしは命を捨てることもで

き、それを再び受けることもできる」と。もうこうなったら、聞いているほうはなにがなんだかさっぱり分からないかもしれません。捨てて、わたしはまた受けます、と。命を奪われることはない、と断言なさっているわけです。そして結びに、「これは、わたしが父から受けた掟である」、と。三位一体の御子が「掟」とおっしゃっているんですけども、三位一体の一つの神秘、秘儀というか奥義というか、そういう一つの神の姿である、その中にわたしはいる、と。

どうか皆さん、是非三位一体を意識して、今日この復活節第四主日の朗読された福音のことを心に留めて、一週間生活してください。

そして、また、わたしたちは現実的に、わたし自身も、若い方も、本当に小さい方も今こんなに早くコロナ禍ということを経験なさったわけではありますけれども、わたしたちにできることは、社会的あるいは医学的な責任を果たしていくということは勿論であります。しかし、わたしたちがやらなければならないことは、この三位一体の信仰を持っているわたしたちが祈らなければならない、心を込めて、本気で。

ちょっとオーバーな言い方をすれば、わたしたちが本気でこれを祈らなければ、だれが一体祈るんですか、と。そして、このようなことが起こるのは人間の責任であるかどうか、そのことはとてもわたしが言えることではないけれども、しかし世界の動きの中で、人類の歴史の中で今起きていることは事実です。これはわたしたちの責任なのか責任でないのか、断言できません。しかしわたしたちはこうして直面しているわけですから、自分たち信仰者の一つの責務であると考えすることは非常に重要です。特に具体的に言えることは、良い解決を、良い結果がこの世界全体に生まれるようにと願うのは、わたしたちでなければならないでしょう。

わたしたちでなければならないというのは、わたしたちを優位に置いて考えるんじゃない。非常に謙虚に、しかし本当にその責任を果たすということは重要であります。わたしたち自身が、カトリック信徒が祈らなければ、だれが祈るんですか、と敢えて言います。まあ、それぐらいの気合で、どうかこの時期をお過ごしください。そして良い結果がありますように。